

この街の、風景と音。

ARTIST'S VIEW / インタビュー

梅沢英樹 UMEZAWA Hideki

特集「まえばしサウンドスケープ」

アーティストコラム 萩原留美子

アーティストが見た前橋

ARTIST'S VIEW

梅沢英樹

UMEZAWA Hideki



アーティストが切り取った
前橋を紹介するコーナー



白川昌生 さんで “水川屋” で蕎麦

1



母のオフィスで、食事へ

2



赤城山へ向かうバスから

3



火垂る 塔 様子です

4



自転車 利根川の河原まで

5



氷も雪もみえる音、氷の流れる音

6

INTERVIEW

風景の中に 音の記憶を探して。 LOOKING FOR A MEMORY OF SOUND IN THE LANDSCAPE.

2016年12月に招聘アーティストとしてアーツ前橋で滞在制作を行った、桐生市出身の梅沢英樹さん。国内外のレーベルから音楽作品をリリースするほか、2015年にはフランス、マレーシアで公演を行うなど、音楽・アートの垣根を越え幅広く活動しています。生活や自然のなかにある音を使って作品を制作する梅沢さんの耳に、前橋という土地の持つ音はどんなふうに響いているのでしょうか。

ーサウンドアートの世界へはどういう経緯で？

梅沢 子どもの頃にピアノを習っていたのですが、自主的に音に向き合い始めたのは、高校生の頃にターンテーブルを買ってからですね。人の曲をかけるというよりは、自分で何か作り出すことに興味があって、少し変わった使い方をしていました。20歳になる前くらいに高性能かつ安価なポータブルレコーダーが出てきて、常にそれを持って音の日記のような感じでレコーディングをするようになりました。それで何か作品を作ろうと思った時に、ずっとキッチンの音が好きで気になっていて、そういった音を集めて作ったのが、2009年に発表した『Kitchen』というCDです。それから色々と国内外からオファーを頂くようになりました。そこからもっと実験的な、例えば水道管が発するノイズを使った作品を発表したり、ステレオだけでなく複数のチャンネルで空間的に音を配置をするっ

ていることをやっていくうちに、だんだん美術の領域にも近くなっていったという感じですね。

ー今回の前橋での滞在制作のプランは具体的に決まっているのでしょうか？

梅沢 そうですね、一つは（赤城山の）大沼に興味があって、11月に沼の底の音を録音してきました。前橋の風景の中でずっと変わらないものについて考えたときに、大沼はその象徴としていいんじゃないかと。日常のなかでは当たり前にあるものとして気につけないけれど、こうしたアプローチをとることによって違った側面が見えたりだとか、意識が変化することもあるんじゃないかなって考えています。それから、前橋は風がすごく強いんですよね。エオリアンハーブっていう、弦を木の枠に張って風で弦が振動して音が鳴るという仕組みの、昔からある楽器なんですけど、前橋の空っ風で音を鳴らすっていうのもちょっと試してみようかなと思っています。

ー音に対してのアプローチとしては、

既存の楽器を鳴らすことよりも、自然の中に存在する音で構成する感じですね。

梅沢 そうですね、今回の滞在制作ではリサーチの中で新しい見かたを見つれたり、文脈や関係性を構築することができればと思います。僕はミュージック・コンクレート（音素材を刻んで構築する）と呼ばれる音楽領域で活動することが多いのですが、今回一番最初にやろうと考えていたのは、街の人たちの、例えばカセットテープだったり8ミリビデオといった古いメディアを集めて、街総体の記憶のようなものを構築することだったんです。今回は期間が短いので、それはアイデアとして残しておこうかなと。

ーそれは是非いつか聴いてみたいですね。フィールドレコーディング（屋外で自然音や都市のノイズなどを録音すること）で、ここに行ってこの音を録ってみたいというのはありますか？

梅沢 やっぱり南極とか行きたいですね（笑）。去年「0℃」というサウンドインスタレーションの展示を企画しました。世界中のアーティストから氷の音を集めた展示だったんですけど、やっぱり色々な解釈があっ

て、アイスランドの一万年前の氷の中の音や、南極のブリザード（極地にみられる暴風雪）が吹き荒れる音、グラスに入れた氷が全て水と溶け合うまでかき混ぜるという作品だったり。身近な素材でどこにでもあるんだけど、場所や環境によって音や状況、意味合いが変化するの面白いと思います。

ー氷もそうですが、やはり水の音に惹かれる？

梅沢 水って、気が遠くなるくらいの時間をかけて世界を循環していて、の中で凝固や融解を繰り返していますよね。そう考えると、その土地の記憶だったりいろんなものが含まれているのではないかなとか、想像してしまいますね。ー前橋に限らず、活動を通して音と地域の文化をつなぐということについて今後の展望はありますか？

梅沢 どこかの街に出向いてフィールドワークをして作品を作るということはライフワークとして続けていきたいですね。

ーそれはただ音を録るということではなく？

梅沢 単純にその場所で音を録る／作品をつくるということではなくて、リサーチを重ねて、その結果アウトプットされるものが、その場所や社会に対してどういった意味合いを持つのかを考えたり、自分にとっても日々の習慣や手癖のようなものから一度離れて、新しい発見や体験をすることによって相互的なフィードバックを得られることが、こうした活動を良いところだなと感じています。

梅沢 英樹

1986年群馬県生まれ、東京都在住。東京藝術大学大学院美術研究科在籍。国内外より電子音楽作品のリリースやインスタレーションの制作／発表、サウンド・パフォーマンスを行う。主な受賞歴にリュック・フェラーリ国際コンクール／プレスク・リヤン賞受賞（2015年）。Contemporary Computer Music Concert 2015 ACSM116 賞受賞。これまでの展示に「0℃」（blanClass、2016年）など。



日常の風景にある、前橋の音。

日常のなかにあるさまざまな音。

Illustration: あしか図案

普段、気に留めずともそこに存在する音。

音は風景の一部として、わたしたちの記憶に刻まれています。

この街を形作る「音風景（サウンドスケープ）」。

今、あなたのいる場所にはどんな音が聞こえていますか？



広瀬川の流れる音

詩人・萩原朔太郎も愛した広瀬川。
流れは意外と速く迫力がある。



前橋名物ソースカツ丼。

厨房から聞こえる油の弾ける音が食欲をそそる。

SLの汽笛の音

JR 上越線を現役で走る D51、C61 など、蒸気機関車の汽笛が聞こえると心躍る前橋市民。



夏のカミナリの音

山に囲まれ夕立の多い前橋の夏の風物詩。



るなばあくの
10 円木馬の音

前橋の子どもたちを背負い続けて 60 年！

10 円で乗れる電動木馬の音は今も昔も変わらず。

ワカサギ釣りの
氷に穴を開ける音



前橋のシンボル赤城山。その山頂の大沼が
氷で覆われるとワカサギ釣りのシーズン。



からっ風の音

上州名物「かかあ天下とからっ風」。

赤城山から吹き下ろす強風は自転車の天敵！

初市のお焚き上げの音

400 年の歴史を持つ前橋初市まつり。前橋八幡宮
の境内で燃やされるダルマの火にあたると一年は
風邪を引かないとか。



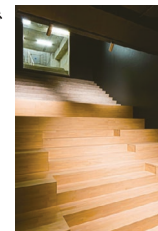
＜ アーツ前橋の音風景 ＞

隠し部屋のような空間で
毎日定時に聞ける音

照屋勇賢

《静のアリア》

場所：ギャラリー 0
(地下ギャラリー内)



地下の展示スペースの脇にある扉をあけると、そこには木の階段。ここでは毎日14時と16時から、東日本大震災後の2011年3月27日に、群馬交響楽団が行った演奏会の音と黙祷の様子を聞くことができます。隠し部屋のような空間で、約40分間の音に耳を傾けてください。

時間を知らせる踊りと音

off-Nibroll

《いつもの時間》

場所：アーツ前橋
西側入口 正面



カフェの入口で「ピッピッピ ポーン」と時報の音。約200名のワークショップ参加者の動きによって秒が刻まれる時計の映像作品。もしかしたらあなたの知り合いが出ているかも！

「から(空)っ風」 萩原留美子

群馬で生まれ育った私には、有名な上州のからっ風は馴染みのあるものですが、2016年3月に前橋で滞在制作をした時、久しぶりに味わった強風には面白い体験をさせられました。街中のいろいろな物が、強い風のおかげで微妙に違和感のある方向にまわっているのです。例えば、滞在した野町スタジオの台所の換気扇が、穴に吹き込んでくる外からの強い風のせいで突然ガタガタと回り出し、驚かされました。瞬間で身体的に受けた感覚と予測の不一致、そして、論理的にその理由を理解する行為にタイムラグがあり、非常に奇妙な感覚を覚えました。最初は、幽霊なのかと思ったほどです。これらのとりとめのない日常の出来事をきっかけに、偽物の風を作り出すインスタレーション作品のアイデアを思いつきました。明らかに風がないという状況にもかかわらず、風が引き起こす現象を人工的に作り出せば、その場にいる人には、偽物の風が身体的に感じられてしまうのではないかと思ったのです。前橋での一ヶ月の滞在後、このアイデアをブリュッセルの植物園でのコミッションの仕事で、10月に実現しました。植物園にあるパビリオンの中の一本の木が、内部に風があるはずはないのに、風に揺れているように見えるというサイトスペシフィックインスタレーションです。《Fake Wind》と、そのままに名付けられたこの作品は、公園内の自然のリズムの中で起こる不自然なパビリオンの内部の動きが、不思議な違和感を呼び起こし、周囲のものへの知覚認識をユーモラスに疑わせるような作品になりました。前橋のからっ風からインスピレーションを受け制作されたこの作品、なかなかウケがよかったです。ところで、空の風と書く“からっ風”の由来を深く考えてみると、面白いと思いませんか？

WORKS

収蔵品紹介

アーツ前橋では、前橋市がこれまでに収蔵してきた作品に開館後に新たに収蔵した作品を加えて約650点を収蔵しています。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。

童謡『うみ』へのオマージュ

小野田賢三《聞こえる?》 Can You Hear?

2013(平成25)年 サウンドインスタレーション
コンピュータ、スピーカー、アンプ、楽器
2013年度購入

「海は広いな大きいな～」が歌い出しの童謡『うみ』。幼いころから幾度となく口ずさんできたこの曲は、前橋が生んだ音楽家・井上武士(1894-1974)の作曲です。同じく前橋生まれの小野田賢三(1961-)は、そのオマージュとして《聞こえる?》を制作し、アーツ前橋の開館記念展「カゼイロノハナ 未来への対話」で発表しました。

鑑賞者が自ら壁に耳を当て、かすかに聞こえてくるメロディと、それらの音に呼応するかのように背後から聞こえてくる



萩原留美子 (はぎわら・るみこ)

群馬県安中市出身。1999年高崎経済大学附属高等学校美術コース卒業。2004年東京造形大学卒業後にオランダへ留学、現在もアムステルダムを拠点に活動している。2016年2月から3月にかけて、アーツ前橋の群馬県ゆかりのアーティストを対象にした滞在制作事業に参加。なにげない日常の物事への認識を、ユーモラスかつ微細に変化させ、新しい鑑賞方法を提示するような詩的表現のある作品制作を行っている。



Photo: KIGURE Shinya

単音を、頭の中で組み合わせるように意識を向けると、懐かしい童謡『うみ』が聞こえてくるという音響空間が作品となっている。

小野田は前橋にアトリエを構えながらも、ドイツやフランスなど主にヨーロッパで作品を発表する機会が多い。アーティストとして活動する以前にはNTTのエンジニアとして働くなど、職人のような音響システムの知識が作品制作の背景にあり、最小限の音の動きを用いて構成される作品を発表している。本作品では、展示壁の内面と外面という空間を巧みに利用しつつ、楽譜の解体と再構成を行うことで、空間や時間によって変化する音を、ひとつの環境として提示した。

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。

まえばしぶんか探索隊

うしろまえばし

<https://www.facebook.com/ushiromaebashi/>

「うしとまえばし」



青梨子町の八幡宮菅原神社。
リアルな牛が、ごろんと寝そべっていました。
「うし」ろまえばし、だけに(^^)v (隊員A)

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。



みんなで作る「マエバシマンがー」1コマ横36×縦23ミリのフォーマット(拡大可)でご応募ください!

宛先は〒371-0022 前橋市千代田町5-1-16 アーツ前橋 アンドアーツ担当まで。

まえばし

COLLECTORS FILE

#4



本町・株式会社フジサワ

藤澤 茂さん

シングル盤 約1,000枚
LP 約1,000枚
CD 約5,000枚
カセットテープ 約800本

街の人が集めているものを紹介してもらおうコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る?



オープンリールの時代から自作のコンピレーションアルバムを作り続けて、最新作のCDは67枚目。旅先で撮った写真でジャケットも自作するのが楽しみ。シングル盤はオールディーズが中心。自慢のレコードはビートルズ。この帯がついたオデオン盤は珍しくて、コレクターズアイテムなんだ。



EVENT

まちなかイベント情報

講演会「日本の文化・日本人の誇り」

2017年2月2日[木] 13:30～15:00 (開場 12:30)

前橋テルサ「テルサホール」

俳優・映画監督の津川雅彦氏の公開講演会が催されます。入場無料。

「ya-gins vol.21 杉本 篤」

2017年1月28日[土]～2月26日[日]

オープン 毎週 金・土・日曜 13:00～20:00

ya-gins 前橋市千代田町 3-9-2 弁天通りアーケード内

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

「前橋の美術 2017 ～多様な美との対話～」

2017年2月3日[金]～2月26日[日]

開館時間：11:00～19:00 (入場は18:30まで)

休館日：水曜日

観覧料：無料

主催：前橋の美術実行委員会 共催：アーツ前橋、上毛新聞社



前橋市出身・在住で創作活動を行うアーティスト 48 名による市民企画展です。未来の前橋を担う若者たちへの刺激となることを目的に、アーティスト、ギャラリスト、学芸員によって構成される実行委員会により企画されました。今の時代を生きる前橋のアーティストの作品をぜひご覧ください。

参加アーティスト

【絵画】池田鮎美、今井充俊、金井訓志、坂本敏、塩原友子、関口正子、高畑早苗、田中正、司修、平井陽子、ましもゆき、室越健美、茂木統一、やちだけい、山元勝仁、山本麻友香、横田尚、吉田章二 【版画】糸井千恵美、多胡宏、野村たかあき
【写真】木暮伸也、関口明 【平面】住谷夢幻、山崎勝之 【映像】石井秀人、小泉明郎
【彫刻】明田一久、今井由佳、大島康幸、下山直紀、関口光太郎、三谷慎、ヨシダノボル
【工芸】飯出袈裟市、登坂和嗣、富田文隆、豊田共子、林哲也、松尾昭典
【インスタレーション】小野田賢三、カナイサワコ、喜多村徹雄、ジル・スタッサー、柴田知幸、八木隆行 【パフォーマンス】藤口諒太、村田峰紀

参加アーティストの八木隆行の作品は下記の日時、会場で展示します。

2月4日[土]～26日[日] ※土日のみ開場

時間：13:00～19:00

会場：前橋文化服飾専門学校付属アートスペース
(前橋市本町 2-18-8)

関連イベント

参加アーティストによるワークショップ

「バレンタインマイバッグを作るワークショップ」

2月11日[土] 13:30～15:00

講師：高畑早苗 場所：アーツ前橋 スタジオ

参加費：無料 定員：30名

対象：3歳以上(小学生までは保護者同伴) 高校生以下無料

※上記以外にも、会期中毎週土日には参加アーティストによるトークがごございます。詳細はアーツ前橋ホームページをご覧ください。

&Arts ISSUE 7

アンドアーツ 第7号

発行：平成 29 年 1 月 13 日

企画・発行：アーツ前橋 制作コーディネーター：M-wave

編集：岡 正己 編集・アートディレクション・デザイン：殿岡 渉 (あしか図案) 写真：上原ミワ、木暮伸也

ロゴデザイン：荻原貴男 (OGIWARA TAKAO DESIGN) 制作補助：吉井あずみ

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16 TEL：027-230-1144 FAX：027-232-2016

表紙の人：(右から) 梅沢英樹さんと小管絵里さん (西洋亭 市)

www.artismaebashi.jp



文化庁

助成：文化庁 平成 28 年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業